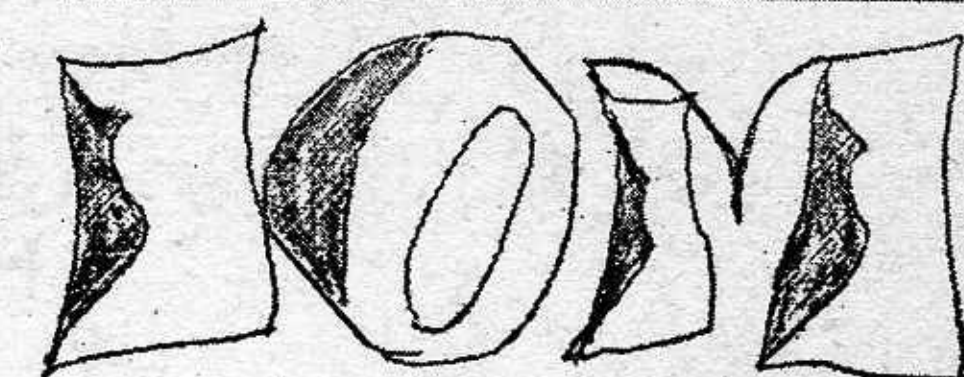




25, Oct. 1969.

N-ro. 14 - 81

Eld: Kou MUKAI
354, Kameyama, HIMEZI
Japanio

通信

昭和44年10月25日発行

通号 81 - 第14号

姫路所 かも山 354

イオム同盟 向井 彦

とではなかつたから安心。④ そのお蔭で、なにかポケットとしていたのが、この数日、ちよつと眼を覚ましたような気分で、イオムを久しぶりに出そうと思いたった。④ 10・21から11月のたにかいにかけて、まわりはげしく動き、緊張している。その中で今号のような個人的私事にかゝらずつたもの書くことは、申しわけないおもしろいしきりにするのだが…… (10月17日夜)

9月23日のことなど

9月23日の集会の出来事については、あまり触れたくはない。……しかし東京でも〇君に対する何かがあり、さらに名古屋での講演と討論の集会にも、わざわざ大阪から工とA君が妨害？に出張した。と肉くこへ東京・名古屋の詳細は知らないが、たまたまぼくがぶつかった9・23のことを一その日だけのこととして放置する結果となつていいるべく自身の責任を、そのようなあり方の自分を許すことが出来なと思う。できるだけ簡単にいきさつとぼくの考えをかく。

① ギロチン社事件の中浜鉄の遺稿集ともいふべき「黒パン」が一集が発見されたので、それを復刻したい。その社会に関西の社会運動物故者の追悼会をかねてオールドたちの集りをした。……という話を山松龍代吉さんから聞いたのが、たしから同頃。そして至極安易に、ぼくも名前だけの呼びかけ人になつた。

② 7月頃、逸見さんとIN君などの話合いで、午後の追悼会のおとの会場を利用して、夜、全組まるまのグループと関連なく、オ一部オ二部になつたシンポジウムをひらく。その講師にE氏やN氏などの名が出ていいると肉いた。(当然ぼくも出席するだろうというので、ぼくもそこに加えられていいるし、かつたが、はつきりはしなかつた。)

③ 8月？日の夜半、某君から電話がかかつてきた。「9・23に〇君をよんでいいるのか。役がくるなら断平……」そんな話を聞いていいる。……とこたえた。それで工君らのグループが何かを考えていいるらしいことがわかつた。

④ 9月21日、高島君に出あつた。19・23を工君たちのグループが粉砕しようとしていいる。自分としても出席をためらつていいる。……と云う。ぼくはその日まで個人的事情で30日のひる向には出ていいたが、どうしようか、と迷つていいた。が、その話をきいてすぐに決心した。「どうしても出席しなければならぬ……」。9・23に主体的にはほとんど取組んでこなかつた自己批判をもふくめて、ぼくはその肉題を受けとめる役を買つて出よう。」と。

⑤ そこでぼくは高島洋君に、次のような意味のことをしやべつた。「彼らが集会粉砕をやろうというなら、ぼくは個人として、断平それに抵抗する。彼らの集会粉砕の論理についての是非は、ぼくにどうも向うところでない。彼らが無自覚的、とらうとしていいる。アナキズム理論とアナキズム運動における檢察官的な役割を仲間として見のがすことはできない。そのような傾向がぼくらの運動のなかに混入しようとするに對しては、ぼく流のやり方でそのことを無意味化する。彼らにぼくをなぐらせてやる。」

⑥ 9月23日当日、彼らがやつてきて、集会、神話のビラ

⑦ イオム通信を、とつぜん中絶してから5ヶ月が流れた。⑧ その間、ぼく個人の身辺にいろいろなことがあつた。小林美枝子さんの死。尾崎弘君の帰日。日刊ハンパク(新刊)。姫路行動事務所の閉止。SSさんのこと。自由連合編集の移譲。

⑨ 「内なる監視」というには、あまりにもどろどろで混濁した自分自身の姿が見えてきて、どうしようもなかつた。

⑩ 9月23日、後述の内ゲバまがいのことがあつた。さらに10月15日姫路での定例行動のおと、がえり道で、ヤクザのチンピラ右翼ら6人にかねてから狙われていた。襲われた。(大したダメージはなかった。ポケットとしていたのが、この数日、ちよつと眼を覚ました。)

⑪ 10・21から11月のたにかいにかけて、まわりはげしく動き、緊張している。その中で今号のような個人的私事にかゝらずつたもの書くことは、申しわけないおもしろいしきりにするのだが…… (10月17日夜)

を配布しあつたのをきつかけに、予定どおりぼくは発言して、きわめて非論理的かつ時には挑発的言辭を弄した。その結果、拒打とは云えない程度の頬打ちを二回受け取る、ということになつた。

⑫ ぼくが彼らに對して、コミュニケーションを全面的に拒否し、拒打されようとした理由は次のことに尽きる。

⑬ 強制的に解決は欺瞞的処理である。

⑭ 彼らの批判が、かりに正当であつたとしても、その正当さを示すのは、彼ら自身が創り出したそれ自らの集会その他の行動において、この集会を相対的にのり超えること以外にない。

⑮ 己れを傷つけぬまいがありえぬように、他者への批判が、自己への逆批判をもふくめた切実な自身の痛みとして知覚されていいないならば、真の批判たりえないだろう。……彼らは、ぼくをなぐることによつて、それを知らねばならぬ。……批判することによつて、結果として自己の立場を顕現することになるそれは、単なる思いあがりのおセツ介か、検査の思想である。)

⑯ 9・23はこのようにして終つた。だが、ぼく自身の若干の気おいや虚勢も作用して、彼らに對してのぼく自身の考えを、当初の意図するものの如く充分に示すことはできなかつた。そしてするが、あいまいなものに終つてしまつたと思う。それは市粉砕派にとつても同様で、共に不幸なことといわねばなるまい。

(ノート)

★ 話合ひをして、問題の本質と全く無縁なことでは、対応できないとわかつていいるとき、その話し合うという根底的な基盤をつきくずことからやりはじめ、以外、他にどんな方法があるだろうか。

★ 10月15日、ぼくが右翼にとりかまれたとき、とつた姿勢は「回答無用、さあやってみい」というものであつた。衆人環視の中で、いっかやられるなら今が一番條件的に得策だ、と内心考へたせいもある。そして殆ど抵抗せずになぐられられた。これらの右翼は毎週土曜の、駅地下道でやるフォーク集会に、いつもあらわれていながら、せややる連中である。さて、ぼくをさへぐんやつつた？というこのことのおとで、次の土曜日に彼らにぼくにどう出るか。顔をあわせるのがちよつとたのしみ？である。(追記)18日土曜日は姿をあらわさなかつた。

★ 中浜鉄の詩は「杉よ、眼の男よ」ぐらいしか知らなかつた。こんど復刻された「黒パン」をみて圧倒されてしまつた、というより言葉がない。そのカの号、大杉栄追悼、特別号(同じく復刻版)と「新進去来堂書」の三冊を出してくれた山松さん達の努力に心から感謝する。

